

小樽商科大学
あきやま よしあき
秋山 義昭 学長

同窓会と地元の支援を糧に 個性的な大学づくりを目指す

——小樽商科大学は、二〇一一年に開学百周年を迎えます。「北に一星あり、小なれどその輝光強し」という言葉のとおり、商学部のみ単科大学ですが、経済、商学、企業法、社会情報の四学科を擁し、また日本語を含め八外国語を学ぶことができるユニークで個性豊かな大学です。今回のインタビューでは小樽商科大学の特色を中心に、百年の歴史をどう発展させ世界に貢献していくのかをお伺いします。

教育の原点は人間形成

——まず、昨今の状況をかながみて、我が国の教育の座標軸をどこに置けばいいのか、先生のお考えをお尋ねします。

学長 一口に教育の座標軸と言っても、非常に難しい問題です。ただ、私は、教育の原点というのはやっぱり人間形成だと思っています。これはすべての教育について言えるのではないのでしょうか。究極的にはやっぱり人間教育、人間形成だと思いますね。

ただ、人間形成と言っても、どのような人間観、あるいは人間像を想定するか、そういう人間像をどうやって形成するか、その手段

はどうするか、そういうことは時代や教育機関によって違いはありますが根底にあるのは一貫して人間形成なのです。これを忘れてはいけないと思っています。

最近の風潮を見ますと、いろいろ問題がありますね。例えば小学校で学力テストの平均点を上げるためにいろいろ操作を試みたり、高校で大学受験に必要なことからこので必修科目を教えなかったり、受験実績を上げるために優秀な学生に高校がお金を払って何十という学部を受けさせたり。こういったことはやはり教育の原点からは少しずれているの

ではないでしょうか

ただ、最近様々な観点から教育論議が盛んですけれど、教育の問題というのは、目先の問題を解決するだけじゃなくて、「百年の計」ですから、我が国の教育のあり方について時間をかけ、十分な検証を経るなど、じっくり腰を据えて考えるべきではないかと思えますね。

倫理観や品格を 忘れてはいけない

じゃ、本学はどうかということになりますと、小樽高等商業学校として開学したのは一九一一年ですから、今から九十六年前になります。四年後に百周年を迎えますけれども、近代化を急いだ明治政府の政策で設置された高商ですから、開学した理念・目的それ自体はやはり実学重視なんです。

商業教育を全国で充実させる必要があるというので、本学は全国で五番目にできた官立の高商ですけど、実は開学時の校長の考え方

もあって、実学教育だけでなく、人間教育、語学教育にも非常に力を注いだのです。実業人であっても、倫理観、品格というものを忘

れてはいけないという考え方です。これが開学以来の教育理念として今でも受け継がれております。

商科系の国立単科大学としての伝統

——小樽商科大学の将来構想、ミッションについて伺います。

学長 こういう時代ですから、国立大学は将来を見据えた明確な戦略や将来ビジョンを持つことが必要です。

本学の場合はどうかといいますが、幾つかあるんですが、一つの柱にしたいのは、やはり商科系の国立単科大学であるということです。これは日本に一つしかないわけで、そういう特色を、まずは前面に打ち出していききたいと思えますね。

それからもう一つは、本学の長い歴史と伝

統です。長年培ってきた本学の伝統をやはり踏襲したいと考えています。長い歴史の中で築き上げてきた伝統ですから、今後もしっかり継承して発展させていきたい。これが二つ目の柱ですね。

本学の伝統について説明しますと、その一つは実学重視です。実学といいますが、戦前の高商時代には石けん工場をつくって、学生が仕入れから、製造、原価計算、販売まで全部やっただというんですが、今はそういう時代ではない。同じ実学といっても、実社会に接点を見いだし、実社会に存在する問題を正

しく分析して、課題を解決する能力を身につけることが現代的な意味での実学と理解しています。

それから、本学の伝統的な強みは語学教育なんです。今八カ国語ですが、戦前も六カ国語を教えていました。これは当時の高商としては大変珍しくて、「北の外国語学校」と言われたくらいです。

こういう語学教育の伝統を踏まえて、国際交流を積極的に展開するなど、語学教育の強みをこれからも強調していきたいと考えています。今でも世界十二カ国十七大学と学生の交換協定を結んでいますけれど、この規模の大学では、外国語大学以外あまりないと思えますね。

本学を受験する学生の志望理由を聞いてみますと、小樽商大へ行って語学を身につけて海外に留学したいという学生がやはり非常に多いのです。

こうしたことを軸にしながら、社会的に存在感のある個性的な活力ある大学づくりを目指していきたい。それが本学に古くから伝わる「北に一星あり、小なれどその輝光強し」の言葉の意味するところでもあるのです。

地域のシンクタンクに

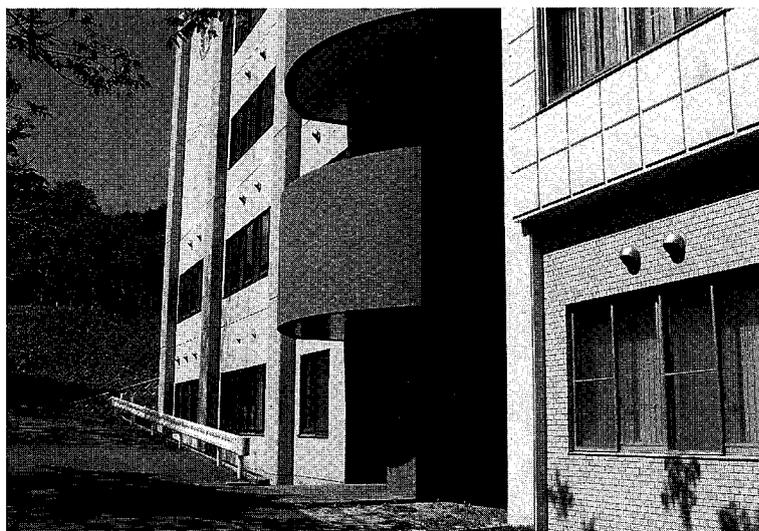
小樽商科大学の特色ある教育と研究についてお尋ねします。

学長 教育と研究両方にまたがることですが、一つは実学重視の考え方を基礎に



秋山 義昭 学長

生年月日	昭和17年6月28日 (65歳)
出身	北海道深川市
学歴	昭和40年3月 北海道大学法学部法律学科卒業 42年3月 北海道大学大学院法学研究科修士課程修了
学位	平成元年6月 法学博士 (北海道大学)
職歴	昭和42年4月 北海道大学法学部助手 44年4月 小樽商科大学短期大学部講師 46年10月 同 助教授 57年4月 小樽商科大学商学部助教授 58年10月 同 教授 平成4年7月 同 学生部長 (~8年6月) 13年4月 同 副学長 (学術担当) 14年4月 小樽商科大学長 16年4月 国立大学法人小樽商科大学長 (現職)



▲ビジネス創造センター（CBC）エントランス

して、地域社会との接点をより強固にするために、平成十二年に「ビジネス創造センター（CBC）」を設置しました。社会科学系の大学で初めてこういった地域共同研究センターができたということで注目されましたけれど、これは今大学の産学連携の拠点となっています。

このCBCは、ビジネス相談、共同研究、委託研究、起業支援等で着実に成果をあげ、いわば地域のシンクタンク役割を果たしています。

研究面では、本学は商学部だけの単科大学

ですが、それだけに学部の壁のようなものはありませんし、全学挙げての学際的な研究が可能です。中でも今、ユーザビリティに関する研究が企業等からも注目を集めていて、大学としても、組織的に取り組んでもらっている研究ということで、できるだけの支援をしたいと考えます。

それからもう一つ。人材育成の面で平成十六年度に専門職大学院アントレプレナーシップ専攻を設置しました。これはいわゆるビジネススクールで、新規事業を創造し、既存事業の革新を行い、組織改革を実行し得る人材を育成するのがねらいです。この設置もやはり本学の実学重視の教育理念を人材育成の場で体現しようとするものなんです。東北・北海道で唯一のビジネススクールで、平日は夜

学長・副学長が市民と直接交流

——地域貢献・地域連携の取り組みについて
お伺いします。

学長 本学はもともと地元との結びつきが強い大学なんです。

そもそも、本学の一万二千坪の敷地が全部地元の寄付ですからね。巨額の建設費を地元から負担してもらい、地元につくってもらったような大学です。戦後、高等商業学校そのまま単独の大学として残ったというのは本学だけで、これもやはり地元、同窓会で活発な大学昇格運動を展開してもらったことが大

間、札幌駅前にある本学の札幌サテライト、土曜日は小樽のキャンパスで授業をしています。

——社会人入学はいかがですか。

学長 学生は大部分が社会人です。

——大部分ですか。

学長 新卒の学生も入学できますが、数は少なく、大部分は社会人です。社会人も、経営管理修士（MBA）の資格を取得することができますということで、大学医学部の現職の教員や理系出身の経営者等いろんな職種の人に来ています。そういった方々が一方所で勉強すること自体、異業種間の交流になって大変有益だという話を聞いています。熱心な白熱した授業を展開しています。学内外から非常に高い評価を受けています。

きかっただけです。

そういうわけで地域貢献については、市民からも期待されており、本学としても地域に貢献する義務や責任があると思っています。

市民の意見から生まれた 駅前プラザ「ゆめぼーと」

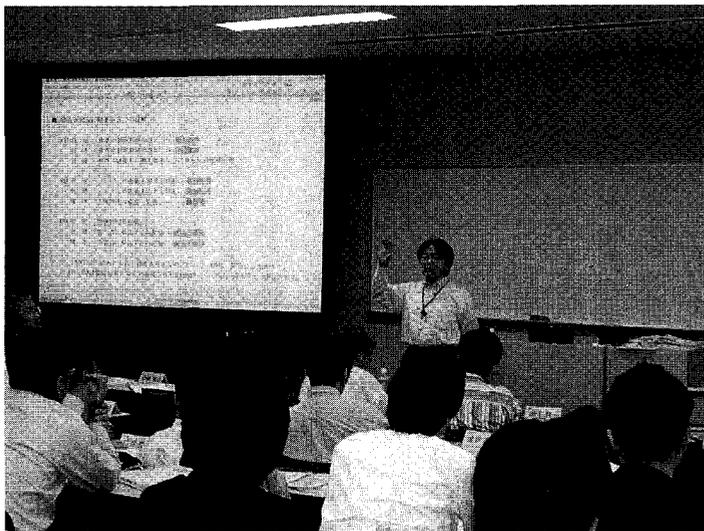
そのために地域に密着したユニークな取り組みもいろいろ進めています。例えば、その一つとして「一日教授会」があります。これ



▲札幌サテライト

も比較的小都市で小規模大学だからできるのですが、われわれ学長、副学長以下市内に出かけていって、市民の方に集まってもらい、大学を取り巻く状況や最近の取り組み等を紹介して、その場で市民から自由に意見、質問、要望を出してもらおうですね。それでやりとりしながら、大学についての理解を深めてもらう、支援してもらおう、協力してもらおうということをやっています。

そこで出た意見の中に、札幌サテライトは結構だけれども、小樽の駅前にもつくって欲しいという意見があったのですが、我々もなるほどと思ひまして、今年の四月に駅前プラ



▲白熱した授業を展開

ザ「ゆめぼーと」をオープンしました。

これは専ら市民との交流の場に使ってもらえればと考えています。幸い今もいろんな会合、セミナー、打ち合わせ等に使っていたら、我々も一カ月に一人ずつ、学長、副学長

同窓会の支援で発展する

——某週刊誌の大学ランキングで出世力が全国五位だということが報道されていますね。

学長 出世力というのは、卒業生が上場企業でどの程度の割合で役員を占めているかと

と交代で出かけていって、市民との茶話会をやったりして、少しでも親しみを感じてもらえる大学にしようと努力しています。

大学が市民に何ができるかということ、常に考えていきたいわけですね。

いう調査です。数から言いますと、本学はまったく問題になりませんが、率では、東大、一橋、慶應、京大に次いで五位だということ、話題になりました。

卒業生が全国的に活躍しているということ、今の学生にとっても大きな励みになりますし、本学にとっても誇りに思っています。

池袋サンシャイン60にある 同窓会本部

——卒業生が活躍されているというお話ですが、同窓会についてお伺いします。

学長 本学には、強力な支援組織として、同窓会「社団法人緑丘会」があります。古い歴史のある小規模大学ということもあってか、卒業生の結束力、母校愛の強さには定評があります。本部は東京・池袋のサンシャイン六〇の五七階にあつて、ここは緑丘会の活動拠点であるだけでなく、OB、OGの交流の場、学生が東京で就職活動をする際の拠点ともなっています。緑丘会からは、国際交流、学術振興、卒業生の講師によるエバグリーン講

座、就職活動、学生の課外活動支援、成績優秀者に対する緑丘奨学金などで多大の支援を受けています。本学の創立八〇周年、九〇周年、およびビジネススクールの設置にあたっては、それぞれ精力的な募金活動を展開していただきました。率直に言って、同窓会のこういった力強い支援がなかったなら、今の小樽商大もないので、とすら思っております。

ユニークな「高大連携」の取り組み

——少子化が進み、特に十八歳人口は減る一方ですが、優秀な学生を集める方策について、今の取り組みをお伺いします。

学長 優秀な学生を確保する方策ですが、ほかの大学でやっていることはひととおりやっているつもりです。本学での特徴的な取り組みといえば高校との連携じゃないでしょうか。「高大連携」を非常に重視しております。高校生のときから、商業教育、あるいは経営学に対する興味を持ってもらうために、特定の高校と協力しながら、高校生向けの集中講義をやったりしています。

——札幌の手稲高校と夏季集中講義をしますよね。

学長 これは大変評判がよかったですね。高校生が興味を持ちそうな、例えば「携帯電話をめぐる5つのエピソード」という講義では、どんな携帯電話が一番売れるかグループを作って高校生に考えさせるんです。大変ユ

——卒業生は商大に誇りを持っているんでしょうね。

学長 やはり、かつては全国から学生が集まりましたし、名門校としての意識も強かったと思います。私は、道外からもぜひ学生に来てもらい、そしてまた全国に散らばって、どこにいても、本学を誇りに思ってもらえるような大学にしたいと考えています。

ユニークな取り組みで、新聞にも何度か報道されました。それから、本学の先生方と高校生が協力し合って本を書きました。『15歳からの大学入門』シリーズです。

——ベストセラーに入りますね。

学長 これが結構売れているんです。わかりやすく書いていますしね。これを高校生のテキストにして、取引社会の仕組みについて理解を深めたり、高校生のうちから大学に対する関心を高める。むしろ本学に興味を持ってもらえばなおいいのですけれども。

多くの相談室を用意

——学生支援の取り組みについてお伺いします。

学長 最近少子化の影響が、精神的にも未熟な学生が増えてきていますから、学生支援は以前よりきめ細かに行う必要があります。



どこの大学でも支援体制には力を入れているようです。本学の場合、学生相談などは、たくさん相談室をつくっているのが特徴、と言えます。まず、何でも相談室。何でも言ってくるという事です。カウンターを置いて対応しています。それから、ハラスメント相談室。そのほか、学生消費相談室なんというのがあります。

相談室を充実させることに加えて、生活支援も考えなくてはなりません。本学独自のものとしては、例えば、提携教育ローンというのがあります。これは北洋銀行と提携して、一般よりも低利で教育ローンをやっています。それから、地域社会で学生がいろんなプロジェクトをつくって活躍しているんですが、そういう学生には大学としてもさまざまな形で財政的な支援をしています。小規模大学だからこそできる学生支援というものもあるわけですね。

きめ細かな指導で好評

——海外留学を望む学生が多いというお話ですが、国際交流・貢献として、留学生受け入れの取り組みについて伺います。

学長 先ほども述べましたように、語学教育の伝統を踏まえた国際交流の活発な展開は本学の特色でもありますので、留学生の受け入れは、今後とも積極的にやりたいと思っています。ただ、数についてはこれ以上規模を広げることはあまり考えていません。数で言

積極的に情報発信し

理解と支援を得ることが大事

——開かれた大学広報活動、あるいは説明責任についてですが、本年二月、経済財政諮問会議の民間議員四名による提言は、小規模単科大学にとって存亡の危機となるものでした。

学長 そのとおり。

——国立大学、地方大学の必要性の理解促進にはさらに積極的な広報活動、社会の皆さんへの理解を求める活動が必要だと思いますが、このことについて伺います。

学長 確かに広報活動は重要です。どちらかと言うと、この点は今まで国立大学は怠っていましたよね。やはり大学は何をしているのか、何をしようとしているのかということ、を対外的にも積極的に情報発信し、理解を深めてもらい、支援してもらおうということが何よりも大切だと思います。

そういう面では、本学は、特に力を入れているつもりです。

えば、海外十七大学と交流協定を締結していますが、大抵いい線ではないか。あとは質的な充実をしていきたいと思っております。

今、交換留学生に対して、一年間の短期留学プログラムをやっていますけれども、これは全部英語で授業をやっており、さらに小規模大学ならではのきめ細かな指導をしているというところで、留学生にも大変評判が良いようです。

広報委員会というのがありますけれど、広報委員会の中に日本マーケティング協会から派遣してもらい専門家の意見を聞きながら広

国立大学の役割を地元を理解してもらうことが必要

——それから、国大協の広報活動の一つになります。運営費交付金の中から、これを競争的資金にするといった話がありますけれども、この点についても、広報活動というのか、大学独自でもさまざまな活動が必要だと思いますが、いかがでしょうか。

学長 そうですね。やっぱり国立大学をよくわかってもらっていませんね。

私も機会あるごとにあちこちで説明してはいますが国立大学はいいですか、いろいろ言われます。特に配分方法を見直して競争

報活動を展開しています。そのほか、地域向けの広報誌をはじめ、各種広報紙を発行し、一般の読者を招いて意見交換会等もやりました。

これからの国立大学は、また、地域住民に身近に感じてもらおう努力も欠かせません。国立大学に地域貢献、社会貢献の役割が期待されているとすれば、地域との結びつきがこれまで以上に重要になるでしょう。本学は、いち早く地域の商工会議所、中小企業家同友会に加入し、地元企業との交流を深め、協力関係を強化してきました。昨年、地元の酒造会社、酒造米を生産している農園、市内の企画会社と協力して、大学グッズの日本酒、酒饅頭を生産、販売しましたが、これもその一環です。

的資金のほうにシフトさせるといふようなことは、本学みたいな小規模な地方の国立大学にとつては、致命傷になります。

ですから、できるだけいろんな形で、国立大学が地方において果たしている役割を地元理解してもらわなくちゃいけない。

北海道知事、地元市長、経済界の代表、商工会議所など、国立大学が今どういう状況に置かれているのか、仕組みも含めて十分に説明して理解と支援を求める必要があると考えています。